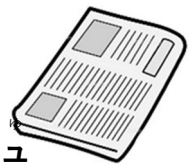
新闻摘要

ニュース記事から（2024年6月1日～2024年11月30日）

有关遗华日本人等、中国・库页岛归国者的新闻



中国残留邦人等、中国・樺太(サハリン)帰国者関連のニュース

5月9日（周四）

曾被扣留在西伯利亚的野村定男先生（104岁，现居岛根县吉贺町）在他入住的医院里向前来的约 60 名听众做了演讲。野村先生于1941 年作为开拓团成员前往前满洲，在西伯利亚被扣留了三年，并于 1948 年返回日本。他回顾自己被扣留的生活时，说道：“最难熬的是提供的伙食少得可怜，许多人因营养不良而死亡” 他还提到了俄罗斯对乌克兰的入侵，并说：“我真心希望人们和睦相处的时代早日到来。”

6月1日（周六）

饭田日中友好协会在满蒙开拓和平纪念馆（长野县阿智村）举行了定期大会。会上还邀请了两位归国者 2 代和 3 代，一起进行了小组讨论，以唤起人们对居住在饭田下伊那较多的中国归国者生活的关注。他们分别讲述了来日本的缘由以及在日本遇到的种种困难。纪念馆馆长寺泽秀文说：“满洲开拓的历史与现今社会有着密切的联系。了解归国者为何居住在该地区的背景是很有意义的。”约 40 名会员参加了此次大会。

6月15日（周六）

在冈山市北区召开了一次题为“遗华日本人经历的听讲会”，了解那些因战争刚结束时混乱而无法从前满洲返回日本、被迫忍受痛苦的人所遭受的经历。博士生山崎哲先生（38岁）讲述了从祖母干子（2020 年去世，享年90 岁）口中听到的经历。战后，他的祖母在满洲与家人离散，被一个中国家庭收养，并在

5月9日（木）

シベリア抑留体験者の野村定男さん（104歳、島根県吉賀町在住）が、入院先の病院で集まった約60人を前に講演を行った。野村さんは 1941年、開拓団員として旧満洲に渡った後、シベリアに3年間抑留され、1948 年に帰国した。「つらかったのは食事の量の少なさ。栄養失調で多くの人が死んだ」と抑留生活を振り返った。さらにロシアによるウクライナ侵攻にも触れ、「人々が仲良くなる時代が来ることを心より願っている」と語った。

6月1日（土）

飯田日中友好協会は満蒙開拓平和記念館（長野県阿智村）で定期大会を開いた。大会では、飯田下伊那に多い中国帰国者の暮らしに目を向けようと、帰国者2世と3世の二人を招き、パネルディスカッションを開催した。二人はそれぞれ来日のきっかけや日本での苦労などを語った。同記念館の寺沢秀文館長は「満蒙開拓は現代につながっている。地域に帰国者がなぜ住んでいるのか、その背景を知るのは意義がある」と語った。定期大会には会員ら約40 人が参加した。

6月15日（土）

終戦時の混乱で旧満洲から帰国できず、過酷な人生を強いられた人たちの歴史を学ぶ「中国残留日本人の体験を聞く会」が岡山市北区で開かれた。大学院生の山崎哲さん（38）が、祖母幹子さん（2020 年に 90歳で死去）から聞き取った体験を語った。祖母は、戦後満洲で家族とはぐれ、中国人家庭に引き取られた後、現地で結婚し、約 40 年後に帰国

当地结婚,约 40 年后返回日本。该活动由“遗华日本人经历的听讲会” 实行委员会与中国・四国中国归国者支援交流中心 (广岛市) 共同主办。

6 月 22 日（周六）

位于长野县阿智村的 “满蒙开拓和平纪念馆” 举办了一场 “战后世代讲述人”听讲会，探讨后代应该如何将战争期间前往满洲的开拓团的回忆传述下去。当天的讲述人是卷口清美女士(58)，其祖母是一名遗华妇女，她在东京都内的首都圈中国归国者支援・交流中心完成了为期三年的培训。她通过读解祖母シズ本人的回忆录和书信，用她自己的语言讲述了祖母作为新泻县柏崎村开拓团成员前往前满洲的经历和感受。

6 月 27 日（周六）

黑田雅夫先生（87 岁，现居京都府龟冈市），在太平洋战争期间作为满洲开拓团成员前往前满洲（中国东北部），在遣返途中流落成了孤儿。他在京都府南丹市内的一所小学为约 100 名 6 年级学生做了演讲。他讲述了苏联军队的袭击以及在收容所看到亲人一个接一个死去的情景，并着重强调了和平的重要性。一名小学生在谈感想时说：“我一边听，一边想象他当时失去亲人的心情该有多么的痛苦啊。”

6 月 28 日（周五）

出版 “Sakhalin (萨哈林)” 影集的摄影师新田树先生（57 岁）于 2023 年底时隔五年再次访问了俄罗斯萨哈林州，他表示：“我要把它交给那些让我拍照的人。” 这本影集是他对那些战后遗留下来的日本妇女等进行紧密跟踪拍摄下来的。正值乌克兰被入侵后日俄关系陷入困境之时，新田先生又重新探寻了一次日本统治时期的 “回忆"。他说：“希望人们能感受到发生在萨哈林的事情并不是在遥远的过去，也不是在遥远的地方”。

した。この会は同会実行委と中国・四国中国帰国者支援・交流センター（広島市）の共催。

6 月 22 日（土）

長野県阿智村にある満蒙開拓平和記念館は、戦時下の満洲に渡った開拓団の記憶を次世代が語り継ぐ姿を探ろうと、「戦後世代の語り部」による講話会を開いた。この日の語り部は、残留婦人を祖母にもつ巻口清美さん(58)で、首都圏中国帰国者支援・交流センターの3年間の研修を修了している。祖母シズさん本人の手記や手紙を読み解きながら、新潟県の柏崎村開拓団員として渡満した祖母の体験や思いを、自身の言葉にして語った。

6 月 27 日（木）

太平洋戦争中に満蒙開拓団として旧満洲（中国東北部）へ渡り、引き揚げ中に孤児となった黒田雅夫さん（87、京都府亀岡市在住）が、京都府南丹市内の小学校で約 100 人の 6 年生を前に講演した。ソ連軍の襲撃や、次々と家族が亡くなった収容所生活について語り、平和の大切さを訴えた。小学生からは「家族を亡くし、どんなに辛かったかと想像しながら聞いた」などの感想が聞かれた。

6 月 28 日（金）

写真集「Sakhalin（サハリン)」を出版した写真家の新田樹さん（57）が、「撮影させてもらった人々に手渡したい」と 2023 年末、5 年ぶりにロシアのサハリン州を訪れた。同写真集は、戦後に残留した日本人女性らの姿を丹念に追ったもの。ウクライナ侵攻の余波で日露関係が難しくなる中、新田さんは日本統治時代の「記憶」を改めて探し歩いた。「サハリンで起きたことが遠い日、遠い地の出来事ではないと感じてほしい」と語っている。

7月2日（周二）

在长野县阿智村的满蒙开拓和平纪念馆举办了“开拓团定居地的变迁"系列展览第 1 期，该展览分为 3 个阶段，追溯了满洲移民定居的历史。旨在从 1932 年满洲移民政策开始到 1945 年战败这 13 年间，对定居地的分布、特征和背景进行叠加分析观察，以探究国家的意图何在。第 1 期展示的是第 1 阶段的“试行（武装）移民期”，从 1932 年派遣第一批移民到 1936 年派遣开拓团成为一项国家政策。接下来的第 2 阶段，即 1937～1941 年，为“国策移民期”；第 3 阶段，即 1942～1945 年，为“移民崩溃期”。计划在本年度分别展出。

8月 11 日（周日）

独角戏“花一匁”在满蒙开拓和平纪念馆（长野县阿智村）上演，该剧的主人公是一位以“开拓新娘”（当时日本实施向满洲开拓地派遣新娘的"大陆新娘"国策）的身份前往前满洲的女性。扮演这个角色的是伊東初绘（53 岁）。这部剧作由剧作家宫本研(1926-1988)编写，告诉人们这位女性在战争中遭受的苦难在战后仍积压心中，挥之不去。这位妇女在满洲生下了两个孩子，在战后混乱中把其中的一个送给了中国家庭。可在战后大规模展开遗孤寻亲活动中，这位母亲却无法站出来说自己就是遗孤的母亲，表现了这位母亲内心深处的痛苦。

8月 14 日（周三）

宫崎静江（享年 104 岁）是从前满洲遣返回国的，战后居住在埼玉县，她把自己的苦难历程写成了一部手稿。据说，这是在她 70 岁的时凭记忆记录下来的。书中记述了遭受苏联士兵和中国人的袭击，以及失去自己年幼孩子的惨烈经历。驹泽大学教授加藤圣文（该中心讲述人事业的总顾问）对此手稿评价道：

7月2日（火）

満洲移民の入植の歴史を3期に分けてたどる連続企画展「開拓団入植地の変遷」の第1弾が、長野県阿智村の満蒙開拓平和記念館で始まった。満洲移民政策が始まった 1932 年から 1945 年の敗戦までの 13 年間を、入植地の分布や特徴、背景を重ね合わせて見ることで、国の意図を探ることを狙っている。第1弾は、最初の開拓移民が送り出された 32 年から、開拓団送出が国策となった 36 年までの第1期「試験（武装）移民期」。続く第2期は 37～41 年を「国策移民期」、第3期は 42 年～45 年を「移民崩壊期」として、それぞれ本年度中に紹介する予定。

8月 11 日（日）

開拓の花嫁として旧満洲へ渡った女性が主人公の一人芝居「花いちもんめ」が、満蒙開拓平和記念館（長野県阿智村）で上演された。演じたのは伊東初絵さん（53）。劇作家の宮本研（1926～88）による戯曲で、女性の戦時の苦しみが戦後も長く続いていることを伝えている。満洲で2人の子を産んだ女性が、戦後の混乱で1人を中国人家庭に渡した。戦後、国を挙げて残留孤児の肉親捜しが進む中、自分が母親だと名乗り出ることができない苦しみを演じている。

8月 14 日（水）

旧満洲から引き揚げ、戦後埼玉で暮らした宮崎静江さん（享年104歳）が、苦難の道中を手記に残していた。70 歳の頃、記憶をたどり自身の体験を記したものだという。ソ連兵や中国の人たちによる襲撃、幼いわが子を失った壮絶な体験が記録されている。加藤聖文・駒沢大教授（当センター語り部事業総合アドバイザー）は、「戦争に負け、満洲で支配する側にいた日本が逆の立場になっていく状況下で、一般の人々はどのような事態に直面したのか。そのことを示すエピソードが、女性の手記には象徴的に分かりやすく書かれている」と評価している。

“曾在满洲占据统治地位的日本，战败后急转直下落魄潦倒，在这种情况下普通日本人会面临怎样的处境？手稿里的一些插话轶事将其象征性地、通俗易懂地描述了出来。”

8 月 17 日（周六）

“大兵库开拓团”从前出石郡高桥村（现兵库县丰冈市但东町）移居到前满洲，后来四处逃难，最终有 346 人集体投河或以其他形式自尽身亡。他们的追悼仪式在但东町举行。共计约有 35 人参加，其中包括 3 名投河自尽后幸存下来的老成员和老成员的 2 代以及当地居民。2 代们表示，他们参加这次活动是因为他们希望“把这场悲剧继续传承下去”。

8 月 25 日（周日）

“高社乡开拓团”是从长野县中野市和下高井郡前往前满洲的，战败后立即逃亡，途中有 500 多人集体自杀丧失了生命。其追悼仪式在该市东山公园的纪念碑前举行。包括当地有关人员在内的约 50 人参加了此次活动，为遇难者默念安息、祈祷和平。该团体的一名老成员在集体自杀中失去了亲兄弟姊妹，他说：“我们一直在致力于让这座纪念塔永久保存下来，作为向子孙后代传承这段悲惨历史的见证，传递我们对和平的誓言。”

9 月 7 日（周六）

乌云女士（86 岁，日本名字：立花珠美）是一名出生在德岛市的遗华孤儿，曾在内蒙古自治区从事过支教和植树活动，时隔大约五年回国探望。在该市举行了一次交流会，包括该市国际交流协会成员在内的约 90 人出席。乌云两岁时，除哥哥外，一家五口就移居到了前满洲。战后，她流落成遗华孤儿，但在 1981 年暂时回国实现了与哥哥的重逢。她说：“能与各位亲戚朋友重逢相聚，令我感动不已。这次还为我 2020 年去世的哥哥扫墓，更是感到十分欣慰”。

8 月 17 日（土）

旧出石郡高橋村（現・兵庫県豊岡市但東町）から旧満洲へ移住後、逃避行の末に集団入水自決などで 346 人が亡くなった「大兵庫開拓団」。その慰霊祭が但東町内で営まれた。入水自殺を生き延びた元団員3人と、元団員の 2 世や住民ら計約 35 人が出席。2 世らは「悲劇を語り継ぎたい」との思いで参加したという。

8 月 25 日（日）

長野県の中野市や下高井郡から旧満洲に渡り、敗戦直後の逃避行中の集団自決で 500 人以上が犠牲になった「高社郷開拓団」。その慰霊法要が、同市東山公園の慰霊塔前で開かれた。地元関係者ら約 50 人が参加し、犠牲者の鎮魂と平和への祈りを捧げた。集団自決できょうだいを亡くした元団員は、「悲惨な歴史を後世に伝え、平和への誓いを語り継ぐ証しとして慰霊塔の存続に努めてきた」と語った。

9 月 7 日（土）

徳島市出身の中国残留孤児で、内モンゴル自治区で教育支援や植林などに携わってきた烏雲（ウユン）さん（86 歳、日本名・立花珠美さん）が、約 5 年ぶりに里帰りした。市内で市国際交流協会の関係者など約 90 人が参加する交流会が開かれた。烏雲さんは 2 歳の時に兄を除く家族5 人で旧満洲へ移住。戦後、中国残留孤児となったが、1981 年の日本一時帰国で兄との再会を果たした。「親戚や友人の皆さんと再会できて感動しています。今回は 2020 年に亡くなった兄のお墓参りも果たせて良かったです」などと話した。

9 月 14 日（周六）

由制片人矢岛良彰（76 岁）制作的《满洲难民感染都市　不为人知的生死搏斗》(农山渔村文化协会）于 8 月出版。战争刚结束时，在中国东北部被迫留下来的日本开拓团员有不少死于斑疹伤寒，但与因突袭而死亡、自杀和遗留孤儿等相比，这部分人并没有受到太多的关注，也没有得到详细的调查核实。这部纪实文学作品正是揭示了这一事实。

9 月 22 日（周日）

在战后 80 周年到来之前，信浓每日新闻社将在 2024 年 1 月至 6 月连载的系列报道《手握锹头　从满蒙开拓中提出的问题》(共 64 集)集结为一册单行本出版发行了。其目的就是挖掘昭和初期前往前满洲的满洲开拓团的历史，思考应吸取的教训，避免再受国家政策的摆布。

9 月 28 日（周六）

山崎哲先生的讲座在长野县阿智村的满洲和平纪念馆召开，他的祖母是一名遗华妇女，他以“战后一代讲述者” 的身份做了这场讲座。山崎先生从祖母及家人所经历的人生中感受到“战争的影响会波及到他们的子孙”。在谈到做讲述人的意义时，他说：“由子孙一代把战争经历传递给年轻人，这对遏制战争也会起到一定的积极作用。”

10 月 30 日（周三）

黑田雅夫先生（87 岁，京都府）和田畑克枝女士（88 岁，大阪府）在前满洲（中国东北部) 是国民学校的同班同学，两人作为满洲开拓团成员前往那里。去年，黑田先生出版了一本记录自己经历的图画书《活在当下》，田畑女士看后发现他就是在严酷的遣返途中失踪的同学。两人重逢之后，便以此为契机开始了合作从事讲述人的活动。他们发誓说：“这本书创造了奇迹。我们要共同呼吁和平"。从今

9 月 14 日（土）

映像プロデューサー矢島良彰さん（76）の手による『満洲難民感染都市　知られざる闘い』（農山漁村文化協会）が 8 月に出版された。終戦直後、中国東北部に取り残された日本人開拓団員が発疹チフスで多数死亡した。しかし襲撃による犠牲、自決や残留孤児に比べて注目されず、検証も進んでいないという。その事実を浮き彫りにしたノンフィクション。

9 月 22 日（日）

信濃毎日新聞社は戦後 80 年を前に、2024 年 1 ～ 6 月の連載企画「鍬を握る　満蒙開拓からの問い」（計 64 回）を書籍化して出版した。昭和前期に旧満洲に渡った満蒙開拓団の歴史を掘り起こし、国策に翻弄されないための教訓を考えようというもの。

9 月 28 日（土）

中国残留婦人だった祖母をもち、「戦後世代の語り部」として講演活動を行う山崎哲さんの講話会が長野県阿智村の満蒙開拓平和記念館で開かれた。祖母や家族の歩んだ人生から、「戦争の影響は子や孫まで及んでいく」と山崎さん。語り部の意義について、「子や孫の世代が若い人へ発信することで戦争の抑止にもつながる」と述べた。

10 月 30 日(水)

満蒙開拓団として渡った旧満州（中国東北部）で、国民学校の同級生だった黒田雅夫さん（87、京都府）と、田畑克枝さん（88、大阪府）。黒田さんが体験をまとめた絵本『今を生きる』を昨年出版すると、過酷な引き揚げ中に消息不明になった級友だと田畑さんが気づいた。二人は再会を機に、協力して語り部活動も開始。「本が奇跡を生んだ。平和への思いを一緒に訴えたい」と誓い、今年から語り部として協

年开始，两人就一直合作从事讲述人的活动，讲述着他们的自身经验。10 月，他们在南丹市园部町的园部中学做了一次演讲。

11 月 23 日（周六）

现年 52 岁的中村庆子是 1980 年 12 岁时作为一名遗华妇女的孙女来到日本的，她在明石市主办的“加深对遗华日本人理解的集会”上发表了演讲。中村女士在中国学习很好，可到了日本因不会说日语在学校里过得很不快活。后来，中村女士遇到了一位理解她的老师，并在其指导下成为了一名特殊支援学校的教师。许多患有自闭症和智障的学生不能够很好地使用语言来表达自己的想法和感受。对此她感同身受，所以为帮助学生们摆脱这种痛苦，她至今仍在努力奋斗着。

◆请注意：本栏目的新闻为见诸报端的报道摘要，并非政府正式公布的内容，其中一部分还包含媒体的观察消息。

力し、体験を語っている。10 月には南丹市園部町の園部中で講演した。

11 月 23 日（土）

中国残留婦人の孫として 12 歳で来日（1980 年）した中村慶子さん（52）が、明石市主催の「中国残留邦人への理解を深める集い」で講演した。中村さんは中国では勉強が得意だったが、日本語ができなかったために学校で辛い思いをした。その後、自分を理解してくれる教師と出会い、その導きで特別支援学校の教師となった中村さん。自閉症や知的障害の生徒の多くは思いをうまく言葉にして伝えることができない。その苦しさがよくわかるからこそ、生徒の力になりたいと奮闘している。

◆ご注意：本欄の内容は、一般の新聞などで報道された内容を中心に要約して掲載しています。したがって、政府が公式に発表したものではなく、一部には報道機関の観測記事なども含まれています。